



# 米国 NICHD 早期保育研究 成果について

サラ・フリードマン (NICHD — 国立小児保健・人間発達研究所)

## I はじめに

このたび、こうして皆様とお話することができ、大変嬉しく思っております。また、日本の保育問題に関心のある方々と意見を交わし、会場の皆様からも教わる機会をいただけることを、とても楽しみにしております。本日は、米国で行われました保育研究について報告をさせていただきます。米国と日本の事情は異なりますので、私の発表についても批判的にお聞きいただけたらと思います。日本の家庭や保育者にも当てはまる研究結果とそうでないものがあるということをご理解いただければと考えております。

本日、私は、NICHD 乳幼児保育研究ネットワークを代表してまいりました。このネットワークは全米 24 の病院で 1991 年に生まれた、さまざまな背景をもつ 1364 人の子どもを長期的に調査している研究者チームです。この研究は子どもの発達に及ぼす保育の影響を評価するために計画されたもので、多くのデータを収集したことにより、今回、ご報告できることとなった次第です。研究調査員は 10 カ所のデータ収集地ならびに NICHD に関連している、いずれも著名な発達心理学者であり、さまざまな概念的、方法論的な専門知識が結集されています。

発表を始めるにあたり、まず最初に、保育を受けている子どもたちには家族がいることを思い起こしていただきたいと思ひます。保

育を論ずる人々は、時としてこれを忘れがちです。このことを念頭に置く必要があります。すなわち——

- ・ 子どもに保育を受けさせることは、育児の一形態である
- ・ 家族の特徴や育児から、母親と保育を受けている子どもの関係を予知することができる
- ・ 家族の特徴や育児から、保育を受けている子どもの認知的並びに社会的発達を予知することができる

—— のです。なお、「家族の特徴や育児」と一口に申し上げましたが、この二つは関連はありますが、同じではありません。家族の特徴には所得や婚姻状況、母親の学歴などの人口統計学的特徴と、母親の心理的充足度や態度などの心理学的特徴が含まれます。また、育児というのは、子育て環境の選択、母親のセンシティビティ\*や対応、あるいは認知的刺激を与えるといった子育てに伴う行動やプロセスをさします。

\* 子どもの心を読み取る力、細やかな心や感受性のこと

## II 親が保育を選択する

子どもに保育を受けさせることは、育児の一形態ととらえることができます。なぜならば、親が保育を選択するからです。親に限りない選択肢が与えられているわけではありませんが、子どもが何歳になったら保育を受けさせる

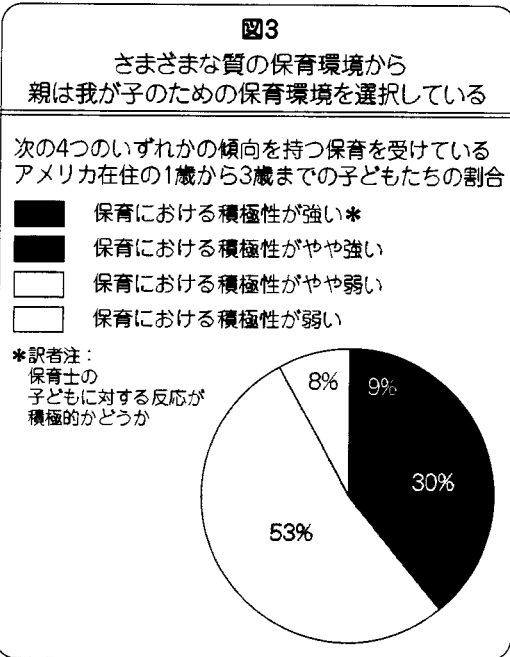
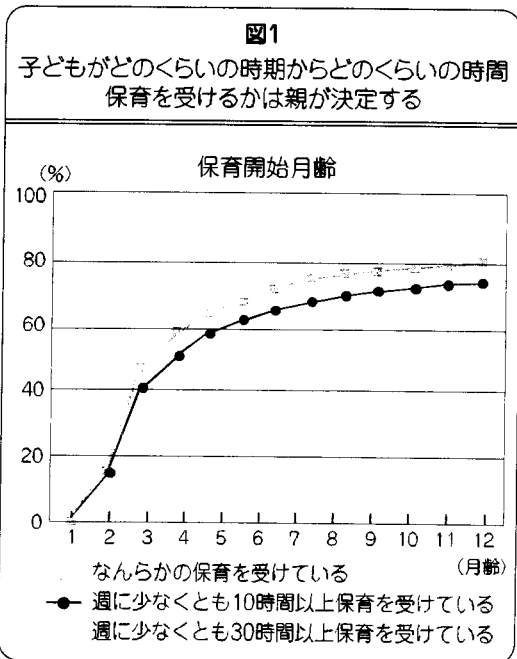
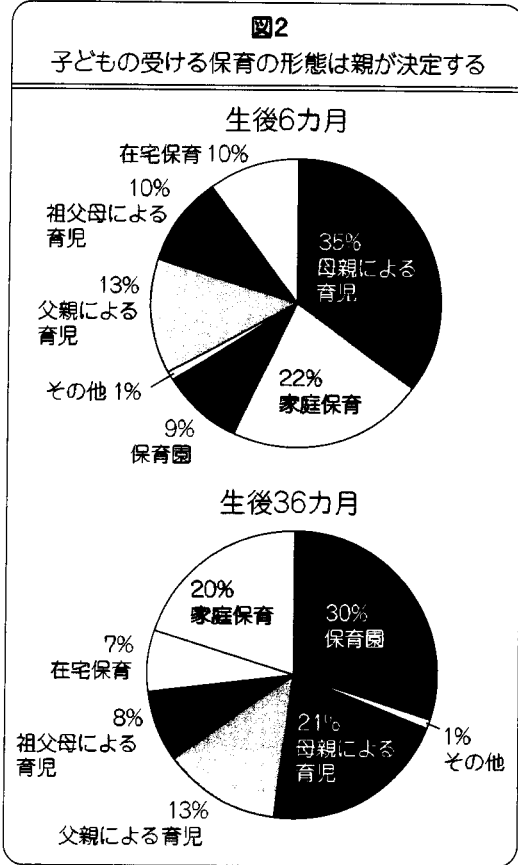
のか、何時間受けさせるのかを決めるのは両親です。

図1をご覧ください。NICHDの研究結果によりますと、6カ月児のおよそ50%が週30時間以上の保育を受けており、60%以上の子どもたちが週10時間以上の保育を受けています。この比率は、月齢を重ねるにつれて上昇します。生後12カ月までに、子どもの80%が何らかの形で、母親以外による保育を受けています。

図2は、さまざまな育児形態があることを示しています。父親や祖父母による育児、親類以外による在宅保育、家庭保育、保育園での保育などがあり、両親はさまざまな質の育児形態のなかから選択を行います。しかし、質の高い保育を利用できる可能性は限られています。米国の保育の質については、NICHDが母親の学歴、保育の種類などによって等級別に分類した保育の質の観察パラメーターを、1998年の全国家庭教育調査の対象となった米国の家族分布に適用し、測定を行いました。

図3でおわかりいただけますように、保育

士の子どもに対する積極性が強い、つまり非常に高い質の保育を受けている子どもたちの比率は、保育全体のわずか9%です。やや



質の高い保育を受けているのは 30 %。そして、あまり質の不高くない保育を受けているのが 8 %となっています。

子どもの保育を選ぶのは親ですから、家庭の人口統計学的・社会心理学的な特徴により、子どもが受ける保育の特徴が予知できるといってもよいでしょう。日本社会における家族的特徴は米国とは異なるかもしれませんが、ここでは米国の研究でわかった家庭の特徴についてお話しします。

表 1 をご覧ください。生後 15 カ月の保育を分析すると、保育開始年齢、保育時間、母親以外による保育の種類や質などに最も深く関連しているのは経済的要因でした。また、母親の人間性や子育てをしながら就業することに関する考え方も、家族が母親以外の保育を選択する要因でした。生後 3 カ月から 5 カ月で母親以外による保育を受け始めた子どもの母親は、外交性、協調性において最も高い得点を得ており、母親の就業が子どもによりよい利益をもたらすと信じていました。母親以外による保育は、家族における子どもの数が少数、母親の低学歴、母親が高所得、家族

の低所得、長い就業時間、また、母親の就業が利点をもたらすと考えている場合に、より強い相関関係がみられました。

保育の種類は家族の大きさ、母親の学歴、家族構成、経済状態、母親の就業に伴うリスクについての信念に関連していました。

保育の質は、保育形態により異なっていました。在宅保育や家庭保育では、家族の所得と保育の質は正の相関関係にあります。また、保育園の保育では低所得層家庭と高所得層家庭の子どもは中所得層家庭の子どもに比べて、より質の高い保育を受けていました。以上のことから、家族の特徴が保育の選択に関連していることがわかりました。

これから私が申し上げることは、皆様にも身近な話題だと思います。米国では、保育が家族との交流に基づく子どもの健やかな発達を阻害しているのではないかということが人々の関心事となっています。より具体的にいえば、母親や父親は次のような問いへの回答を求めているのです。

1. 乳幼児保育は、子どもの母親に対する

表1  
母親以外による保育と関連する因子が可変要因に与える影響

		開始年齢	保育時間	保育の種類	保育の質
家族の特徴	子どもの人種・民族		*		*
	母親の学歴		-	*	
	同居者の有無			*	NA
経済的因子	母親の所得	*	+	*	NA
	母親以外の所得	*	-	*	NA
	所得/生活費	NA	NA	NA	+1
社会心理的因子	母親の性格と人間性	*		NA	
母親の仕事などに対する考え方と行動	仕事することの利点	-	+	*	NA
	仕事することの不利な点		-		NA
	権威的でない				
	子育てに関する信念		+		+1

注：「+」はプラスの関係を示している。「-」はマイナスの関係を示している。「\*」は関係が一定でない。「1」はある場合に限りはプラスの関係を示している。「NA」はその組み合わせ、または可変要因が分析されなかったことを示している。

安定した愛着もしくは母子間の相互作用に有害な影響をもたらすのではないか？

2. 保育が子どもの認知発達、社会的発達、社会的能力並びに社会協調性について直接、間接にもたらす影響は何か？
3. 子どもに保育を受けさせる家庭は、子どもの発達に及ぼす影響力が少ないのではないか？

これらの各質問について、NICHD 乳幼児保育研究の結果からお答えしてまいります。

資料 1 は、家族の所得ならびに母親の就業が子どもの発達に与える影響をという母親の信念を考慮した上で分析をしています。子どもが生後 15 カ月の時に行ったストレンジ・シチュエーションテスト（見知らぬ人と出会った反応をみて母親の愛着を評価する方法）で、母親の愛着安定性が測定されています。

これを見ると、母親の心理的適応性が愛着の安定性に関係していることがわかります。母親の心理的適応性が高いほど、子どもの母親に対する愛着安定性は高くなります。母親の子どもへの心理的適応性は、母親の不安感、落ち込み、社会性、楽しむ心、楽天性、協調性、信頼感、有用性、寛大性を総合して測定されました。

母親のセンシビリティもまた愛着安定性に関係していますが、これは測定の尺度により

ます。コールドウェル & ブラッドレーの H.O.M.E.（面接と観察を組み合わせる構築した半体系的な方法で、家庭で行われるテスト）を用いてセンシビリティを測定した場合、母親の乳幼児に対するセンシビリティや反応が強いほど、愛着が安定する可能性が高くなることがわかりました。しかし、母親と子どもの遊びを通じて測定したセンシビリティについては、有意な影響は見られませんでした。

保育の家族への影響をお話したいと思っておりますのでまず愛着における保育の影響について見てみましょう。資料 2 から、保育の質の二つの尺度として、積極性のある保育を受ける頻度と積極性の強さ別にみた保育、そして 1 週間の保育時間、保育開始年齢は愛着の安定性に有意な影響を与えていないことがわかります。この分析では、家族の特徴、母親の態度、親による育児を考慮しています。

次に、保育により子どもの母親に対する愛着を予知できるかどうかを見てみましょう。母親のセンシビリティが低い場合や週 10 時間以上の質の低い保育、生後 15 カ月以内に 2 回以上も保育形態を変えるとといったことが、愛着不安定性の確率を高めています（表 2）。たとえば、母親のセンシビリティと保育の質の双方で点数の低かった子どもたちのうち、愛着安定性の高い子どもの割合は 44 % ~ 51 % でした。その他の子どもたちでは、愛着

資料1 愛着の安定性／不安定性の解析 母親の影響	
心理的な適応性*	安定 > 不安定
センシビリティ* - 遊び	(有意な影響が見られない)
センシビリティ - 家庭**	安定 > 不安定

\*p<.05 \*\*p<.01  
\*赤ちゃんの心を読み取る力。Sensitivity。

資料2 愛着の安定性／不安定性の解析 保育の影響	
積極性のある保育を受ける頻度	有意な影響は見られない
積極性の強さ別にみた保育*	有意な影響は見られない
保育の量(時間)	有意な影響は見られない
開始年齢(生後何カ月)	有意な影響は見られない
保育が安定した年齢	有意な影響は見られない

\*訳者注：保育者の乳児に反応する積極性を段階別に分けてみる

の安定性を示した子どもの平均値は 62 % でした。

なお、母親のセンシティブティや保育の質を測る際に何を基準にしていたのかをご説明しておきます。母親のセンシティブティを測る 10 の指標を、資料 3 にあげました。また、保育形態については、保育者の子どもに対するセンシティブティ・データを収集いたしました。これは、保育者が保育室全体でどのように行動するかではなく、対象の子どもに対してどのように行動するかをみるというものです。対象としたのは生後 6 カ月、15 カ月、24 カ月、36 カ月の子どもたちで、1 セッション 44 分の授業、2 セッションからデータを収集しました。二つの授業は 1 週間程度の間隔をあけ、各セッションでは、毎分ごとの保育者の活動を観察し、子どもとの相互作用の評価も含めました。資料 4 は、毎分ごとに測定する行動頻度の尺度を示しており、資料 5 は評価です。非常に似通った行動ですが、同一のデータ収集者により異なる情報が収集されています。

次に、母子間の相互作用について述べたいと思います。以前、報道関係者に研究結果を話していて気がついたのでありますが、一般的には愛着(attachment)と母子間の相互作用(mother-child interaction)の区別がされていないようです。これらは、別々に測定する二つの異なる概念です。愛着というのは、子ど

もが母親に対して抱く安心感や信頼といったものです。一方、母子間の相互作用は、母親が子どもの心を読み取り子どもに反応することや、子どもの母親への思い入れといったものです。私たちは生後 6 カ月、15 カ月、24 カ月、36 カ月の子どもたちについて、定型化された母子の遊びを観察したものをビデオテープに 15 分間収録し、母子間の相互作用の質を評価しました。

表 3 でご覧いただけますように、家計所得、母親の学歴、夫婦・パートナー関係といった要素は、いずれも母子間の遊びにおける母親

資料3 母親のセンシティブティ (子どもの心を読み取る力)を測る指標	
1. 子どもの情動を読み取る	
2. 子どもの話や活動に反応する	
3. 子どもの活動を促すが、過度に管理はしない	
4. 子どもの興味を反映する活動をタイミングよく促す	
5. 子どもが十分に元気づけられていない、過度に興奮している、疲れているようなときには、ペースを変える	
6. 子どもの興味、喜びを理解する	
7. 積極的な情動の共有	
8. 適切な刺激を与え、適度な強さの幅と種類の活動を提供する	
9. 悪い行爲の内容に反応し、かつ子どもの理解能力、叱責から得られる便益に見合った、タイミングをふまえたしつけを考慮する	
10. 素直さや自主性を扱う上で、柔軟に対応:素直でないことに過度に反応することなく、依存心を許容しつつ自主性を支える	

表2 愛着の安定性／不安定性の解析 母親と保育との特に重要な関連性					
	積極性のある保育 を受ける頻度	積極性のある 保育の段階	保育の量 (時間)	開始年齢 (生後何カ月)	保育開始
心理的適応性					
センシティブティー遊び	*	*			*
センシティブティー家庭		*	*		
*p<.05					

のセンシティブリティに対し、統計学的に有意なものとなっていました。つまり、母親のこれらの要素の点数が高いほど、子どもに対するセンシティブリティが高くなっていったのです。逆に、母親の気分的な落ち込みや子どもから離れることに対する不安感が強いほど、子どもと遊んでいる時のセンシティブリティは低くなっていました。母親の子どもと積極的に関わる度合いについては家計所得、母親の学歴、母親の気分的な落ち込み、子どもと離れることへの不安感が関係しています。

また、保育の質は母子間の相互作用における母親のセンシティブリティと正の相関関係が

ありました。しかし、保育時間が長くなるほど、母親のセンシティブリティは低下し、子どもとの関わりが少なくなります。注目したいのは、この保育時間と母親のセンシティブリティの関連は生後6カ月、15カ月、24カ月、36カ月のいずれの時点においても明らかだったということです。影響の程度は軽微もしくは中程度で、母親の気分的な落ち込みや子どもの気質といったものと同程度、すなわち、3分の1程度の影響がみられました。

ここまで、家族の特徴が生後15カ月時の子どもの愛着、また、生後3年間の母子間の相互作用に関連していることを見てまいりました。家族の影響は、保育の影響よりも大きかったわけです。

資料4 ORCE行動測定尺度	
頻度:	
■ 積極的情動の共有	
■ 積極的なスキンシップ	
■ 発声や子どもの話に答える	
■ 子どもへ積極的に話しかける	
■ 子どもへ問いかけをする	
■ その他子どもに話しかける	
■ 認知発達の刺激/学習能力を身につけさせる	
■ 行動を促す	
■ お互いに交流のやり取りをする	
■ 否定的/拘束的行為(またはその逆)	
■ 子どもに否定的態度で話しかける(またはその逆)	
■ 子どもの観察/子どもにかまけない/変化(またはその逆)	

資料5 積極性のある保育のORCE評価	
44分間を1サイクルとし、評価は各サイクル終了時ごとに行われる	
■ 自由なコミュニケーションに対するセンシティブリティ/反応速度	
■ 刺激	
■ 積極的な関心	
■ 無関心・放任	
■ 平坦な情動	
■ 干渉(36カ月目)	
■ 探究心の育成(36カ月目)	
構成要素は、保育の全体的な質を評価するための格付けとなっている	

予知因子	サンプル	母親のセンシティブリティ	子どもと積極的に関わる度合い	
家族	所得	全体	**(+)	*(+)
	母親の学歴	〃	***(+)	**(+)
	母親の気分的な落ち込み	〃	*(-)	*(-)
	夫婦関係	〃	***(+)	n.s.
	子どもからの分離による不安	〃	**(-)	*(-)
保育	時間	全体	**(-)	**(-)
	質	観察例	*(+)	n.s.

\*=p<.05    \*\*=p<.01    \*\*\*=p<.001

それでは、親たちが抱く 2 番目の問いについてです。子どもの認知発達、社会的能力ならびに社会協調性について、保育が直接、間接にもたらす影響はなんのでしょうか？ 私たちは、生後 3 年間に受ける保育の経験と子どもの認知的ならびに言語的発達、就学レディネス、問題行動、素直さ、友達関係の関連について分析を行いました。

表 4 は認知発達の結果を示しています。生後 24 カ月および 36 カ月時における発達結果は、認知ならびに言語的領域に認められました。また、表 5 は社会的分析です。結果は、保育時の非従順性、保育者の報告による問

題行動について関連が見られました。子どもの社会的適応性、問題行動についての母親からの報告は表 5 には示されていませんが、分析結果には含まれています。

分析でわかったのは、認知的ならびに社会的発達のいずれについても、家族の特徴が一貫して子どもの発達に関係していたということです。一方、保育の回数などの保育の特徴と子どもの発達結果はそれほど合っていないでした。統計上有意な保育の特徴による影響があったとしても、それらは家族の特徴より度合いが小さいのです。つまり、保育の特徴よりも家族の特徴の方が、子どもの発達結

**表4**  
生後24カ月と36カ月における家族と保育に関する予知因子と認知発達との関係

予知因子	生後24カ月			生後36カ月		
	MDI※2	語彙に関するCDI※3	センテンスに関するCDI	就学レディネス (by Bracken)	言語表現 (by Reynell)	語彙取得力 (by Reynell)
<b>家族</b>						
母のPPVT※1	*(+)		*(+)	*(+)	*(+)	
所得	*(+)			*(+)		*(+)
家庭の質	*(+)	*(+)		*(+)	*(+)	*(+)
妊娠時の胎児への刺激	*(+)			*(+)	*(+)	*(+)
<b>保育の質</b>						
保育園に預けている回数	*(+)	*(+)	*(+)	*(+)	*(+)	*(+)
家庭保育の回数	*(+)					*(+)
モデル1: 積極性のある保育	*(+)		*(+)	*(+)	*(+)	*(+)
モデル2: 言語的な刺激	*(+)	*(+)	*(+)		*(+)	

※1 PPVT: Peabody Picture Vocabulary Test  
 ※2 MDI: Mental Development Index  
 ※3 CDI: Communicative Development Inventory

\*=p<.05   \*\*=p<.01   \*\*\*=p<.001

**表5**  
生後24カ月と36カ月における家族と保育に関する予知因子と、自己統制力、従順さ、問題行動との関係

予知因子	保育時に従順でない		問題行動(保育者の報告による)	
	生後24カ月	生後36カ月	生後24カ月	生後36カ月
<b>家族</b>				
所得				*(-)
母親の適応性			*(-)	*(-)
マザーリング			**(-)	***(-)
<b>保育</b>				
量			**(+)	
開始年齢			*(+)	
質			*(-)	**(-)
保育の条件が安定している	*(+)			
グループケアの条件が安定している	**(-)			**(-)

\*=p<.05   \*\*=p<.01   \*\*\*=p<.001

果をよりよく説明していたということです。

それでは、親たちの3番目の問いかけに進みます。3番目の疑問は、母親が子育てをしている場合と長時間保育を受けさせている場合とで、子どもの発達はどう違うのかということです。この問いかけに対し、二つの子どもたちのグループを比較しました。母親がほとんど全面的に世話をしている子どもと、長時間保育を受けている子どものグループです。

母親がほとんど全面的に世話をしている子どもとは保育時間が平均週10時間未満、長時間保育を受けている子どもとは保育時間が週30時間を超えるものとしました。24カ月児については、母親による全面的育児は164名、保育を受けている者が184名。また、36カ月児では母親による全面的育児は127名、長時間保育を受けている者が147名でした。なお、家族の特徴については人口統計学的特徴、社会心理学的特徴、人間関係の三つを取り上げました。資料6は、家族の特徴を示しています。子どもの発達度合いについては、生後24カ月、36カ月時に評価を行い、認知的・社会的発達の領域を検討しました。また、資料7には、生後24カ月および36カ月時における子どもの特徴を示しました。

私たちは二つのグループについて、家族の

特徴と子どもの発達結果についての相関関係が異なっているかどうかを調べ、その相違が偶然によるものではないことを結論づけようとしてきました。結果は、生後24カ月、36カ月いずれの月齢時においても、家族の特徴と子どもの発達結果のマトリックスに十分な相違は見られませんでした。

### III まとめ

これまでの発表を要約させていただきます。子どもにいつから保育を受けさせるかについてや週何時間ぐらい受けさせるか、また、保育の種類や質についての決定は家族が行います。これらの決定を導くのはおもに経済的な要因ですが、母親の心理的特徴も影響してきます。

表6に本研究の第一段階の研究成果をまとめました。家族の特徴や親による育児は、乳幼児の母親に対する愛着や母子関係、子どもの社会的能力、問題行動、言語的発達および就学レディネスと重要な関連性があります。家族の特徴ならびに親による育児は子どもの発達結果に一貫して関連しますが、保育の特徴は必ずしもすべてとは関連しませんでした。さらに、家族の特徴や親の育児による影響の方が、保育の影響よりも大きくなってい

資料6	
母親が全面的に世話をしている子どもと、長時間保育を受けている子どもへ家族の与える影響を比較するための、家族に関する可変要因	
人口統計学	夫婦関係 所得/生活費
人間性/行動	性格 気分的落ち込み 仕事することの利点 権威的でない
マザーリング /親子関係	遊びにおけるセンシティブティ 家族への積極的関与 愛着

資料7	
子どもの示す特徴	
生後24カ月	精神的発達 (Revised Bayley) 社会的能力 (Adaptive Social Behavior Inventory) 問題行動 (Child Behavior Checklist)
生後36カ月	就学レディネス (Bracken) 言語表現 (Reynell) 聞き取りのための語彙 (Reynell) 社会的能力 (Adaptive Social Behavior Inventory) 問題行動 (Child Behavior Checklist)





ティと子どもの発達の間接的な関係をみたのです。具体的には、母親のセンシティブティと乳幼児の母親への愛着、母親のセンシティブティと子どもの依存心、社会的能力、問題行動の関係を調べたわけです。これは、母親による認知的刺激の方が、より適切な要因であると考えたからです。

ご質問への直接的なお答えですが、私たちは母親のセンシティブティを定義づける観察システムを、非常に注意しながら使っていました。発表のなかで、母子間の相互作用を評価する際に見る母親の行動を示す資料をご紹介します（資料 4）。また、コールドウェル&ブラッドレーの H.O.M.E.によるセンシティブティの評価も行いました（資料 1）。ただ、現在までのところ、母親のセンシティブティを決定する要因についての研究は行っておりません。

思うに、子どもの要求に敏感に反応するかどうかを決める母親の意識、ならびに子どもの発達における母親のセンシティブティが重要だという母親の認識、この二つが、女性と幼い子どもたちとの相互作用におけるセンシティブティを決定する上で大切な要素だと思います。

**質問：**小児科医をしております。私は働く母親たちの子どもが結婚して子どもを持った時、どんな子育てをするのか心配をしています。母親が子どもの時に十分な愛情を受けていなければ、自分に子どもが生まれた時に不安を抱くのではないのでしょうか。こうした世代間の愛情の引き継ぎについての情報はお持ちですか。

**フリードマン博士：**母親がフルタイム、あるいはパートで仕事に就いている場合、子どもの

心を十分に読み取ることができない、もしくはセンシティブティを表現する十分な機会がないのではないかと。そして、母親から十分に心を読み取ってもらえなかった子が大きくなって子どもを産んだ時、幼児の心を読み取るという知識がないまま親になってしまうのではないかと心配されているのですね。

私たちの研究では、対象児童のほとんどが保育を受けていました。母親は子どもとのふれあいの時々において、センシティブティを示しています。本日お話ししましたように、母親のセンシティブティと子どもの発達には関係があることがわかりました。母親のセンシティブティが高いほど、子どもの愛着安定性が高まります。センシティブティが強いほど、子どもの社会的能力は高まり、問題行動を示す可能性が低くなるのです。ですから、保育を受けている子どもたちの母親も、子どもたちにセンシティブティを示すことはできるわけです。

しかし、これらの母親が毎日、どの程度の時間、子どもたちの心を読み取ろうとして関わりをもっているのかはわかりません。また、センシティブティを次の世代に引き継ぐのに、どの程度のセンシティブティによる相互作用が必要なのかはわからないのです。ご説明するだけのデータはありませんが、母親が働いており、子どもに保育を受けさせていても、母親が子どもの心を読み取ろうと行動する機会は十分にあります。そして、世代を超えてセンシティブティを引き継ぐのに十分な母子間の相互作用があるとも考えています。

# 乳幼児保育に関する NICHD の研究

訳：小林 登 (CRN 所長、国際小児科学会会長、東京大学名誉教授)

訳にあたって

私の旧友である NICHD (米国・国立小児保健・人間発達研究所) の Center for Research for Mother and Children の Director, Dr. Sumner Yaffe にいただいた資料のなかに NICHD が一般向けに公表した Robin Peth-Pierce による “The NICHD Study of Early Child Care” (乳幼児保育に関する NICHD の研究) というパンフレットがあり、有益な資料と考えたので NICHD の許可を得て、ここに全訳を発表することにした。21 世紀は、母親単独による子育ては少なくなり、母親・父親、そして保育者がチームを組んで行う子育てが中心となろう。以下、ここに全文を紹介し、そのような問題を考える参考としていただくとともに、それぞれの立場からよりよい子育てのあり方を確立する運動をしようではないか。

なお、翻訳にあたっては、以下のことに留意した。まず、わが国では、「保育」は施設などにおける集団的な子育てをさし、家庭での親なりによる「育児」とは区別されている。英語ではそれがなく “child care” 一つである。その点、翻訳にあたっての区別が困難であった。また、“interaction” は相互作用と訳したが、母子間の行動のやりとりであって、平たい言葉で言えば「ふれあい」である。“sensitive” は、子どもの心を読み取る感受性の強いことを意味すると考えられるが、平たく言えば「細やかな心」「優しい心」「デリケートな心」であろう。“early child care” をどう訳すか考えたが、一応「乳幼児保育」とした。また、“in-home care giver” は子どもの家庭を訪問し子育てする者によると考え「在宅保育」、 “child care home provider” は自分の家に子どもを預かり子育てする者による考え「家庭保育」、 “center-based care” は制度的に認められた施設での子育てと考え「保育園による保育」とした。なお、文中内容の重複する部分は削除した。